

加藤清正の実像

平成19年(2007)に築城400年を迎えた熊本城。逆算すると慶長12年(1607)に熊本城が完成したことになりますが、熊本城の築城については大規模な城郭普請だったにもかかわらず、築城時期をめぐっては諸説あり、今なお不明な点が残されています。

〈22〉熊本城築城

清正が築城した熊本城は、西南戦争の熊本城攻防戦がおこなわれる直前の明治10年(1877)2月19日に原因不明の出火で焼失してしまいます。現在の熊本城天守閣は、昭和35年(1960)に熊本国体と築城350年を期に復元されたものです。

さて、通説では熊本城の築城開始時期は、関ヶ原合戦翌年の慶長6年(1601)とされています。これは、清正死後に成立した伝記「続撰清正記」の記述が根拠となつていますが、現在の研究では築城開始時期はこれよりさらに遡ると言われています。しかし、具体的な築城開始時期については、いくつかの見解があり、はっきりとした時期は今でも確定していません。これは、築城に関する史料の少なさにも因りますが、現在の熊本城と旧隈本城(現在の熊本医療センターと熊本県立第一高校一帯)の隣接した2つの城があったことが問題をさらに複雑にしています。清正は入国当初より現在の熊本城を居城としていたわけではなく、それまで隈本の拠点的城郭だった旧隈本城に入城しています。以下、混乱を避けるため現在の熊本城を「熊本城」、清正が最初に居城とした旧隈本城を「隈本城」と表記します。

隈本城については、建造物などの全体像を伝える史料が残されていないため、残念ながら当時の様子は窺い知れませんが、豊臣秀吉が「名城」と評すほど堅固で大規模な城郭だったようです。現在では部分的に残存している石垣と、「古城」という地名が当時の名残りをわずかにとどめています。前領主・佐々成政もこの隈本城に入城していますが、着任早々に国衆一揆が発生し、その責任を問われてわずか半年ほどで解任されています。そのため普請らしい普請はほとんどおこなわれていませんが、成政の跡を受けた清正は隈本城に入城後、ある程度の普請をおこなっていた様子が史料から窺えます。

城普請に関する清正の書状は、現在20通ほどが確認されます。最も早い時期の書状は、肥後入国の翌々年にあたる天正18年(1590)のもので、堀や石垣の普請を指示している内容です。その後も朝鮮出兵時期を含め毎年のように城普請に関する書状が散見されますが、いずれも断片的で、しかもそれらが隈本城普請に

関するものなのか、新たな熊本城普請に関するものなのかの判別が難しく、議論が分かれるところです。しかし、清正の書状には早い時期から「本丸」、「てんしゅ」、「広間」などの文言が見られます。このことから、清正が肥後入国直後から隈本城を放棄して、新たな居城として現在の熊本城の築城に取り掛かっていたとする見方もありますが、天守閣をはじめ熊本城の主要な建造物が姿を現し始めるのが慶長5年(1600)以降であることを考えると、清正が肥後入国後に手を加えたのは隈本城だったと考えられます。肥後入国後から朝鮮出兵中の文禄年間までは隈本城の増改築を中心におこなわれ、重臣屋敷の新規建設や既存の建造物に手直しを加えていく過程で城域が手狭となり、次第に茶臼山全体へと城域が拡張されていったものと思われます。実際、清正は朝鮮出兵中の文禄3年に国元の重臣に送った書状の中で、櫓の取り壊しと仕直し(新規建設)や新たな地割りを指示しています。このように、従来の隈本城を修築していく中で生じた物理的、空間的な課題に対処するため、城郭規模を現在の城域である北東へと拡大させ、新たな城郭拠点となる現在の本丸へと段階的に移行していったものと考えられます。おそらく、文禄4年(1595)頃から本丸移転構想が持ち上がり、慶長年間に入り、現在天守閣が聳える本丸整備に着手したのではないのでしょうか。

では、その本丸に建設する新たな天守閣の普請はいつ頃始まったのでしょうか。重臣に宛てた慶長5年10月26日付の書状の中で、薩摩の島津攻めに向かう黒田如水を「新城」に迎え入れるため、置敷きなど天守閣内部の作事を急ぐよう指示しています。つまり、慶長5年10月頃にはすでに「新城=天守閣」が大方完成しつつあったことが分かります。いくつかの史料や期間的な問題を併せて考えると、新天守閣の築城開始時期は、朝鮮出兵終了直後の慶長3年末から翌年初頭に求めることができ、完成までにおおよそ2年を要したことになります。そうして、慶長12年頃までには本丸御殿をはじめ主要な櫓群や石垣、城内の重臣屋敷も整備され、我々が現在目にする熊本城の全容が固まったと言えるでしょう。

このコーナーは、おおなみ かずや (元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

